

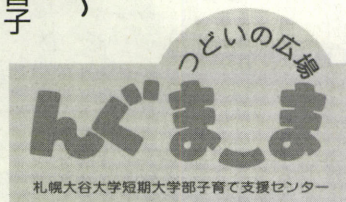
保育の現場から

「友だちをみつけよう」

「みんなで大きくならろう」

「つどいの広場「んぐまーま」の取り組みから」

山田智子



「んぐまーま」ロゴ

(デザイン：同学保育科准教授
清水郁太郎氏)

「んぐまーま」とは

札幌大谷大学短期大学部は、開かれた大学として地域の声を教育や研究に生かしたいと願い、二〇〇五年九月に大学の一教室を利用して子育て支援センターを開設し、センター事業の一環としてつどいの広場「んぐまーま」を毎週一回十時から十五時まで開催しています。

NPO法人子育て応援かざぐるま（以下「かざぐるま」）は、代表を含むスタッフの約三分の一が同学の

卒業生ということもあってつどいの広場の運営を受託し、専任スタッフ二名を配置しています。

開設の十か月前から保育科の先生方と「かざぐるま」で準備会（開設後は運営会議）を立ち上げ、ひろばの名称、目的、理念、活動内容、学生の授業との関連や受け入れ体制、環境設定、広報活動など、一つひとつをていねいに協議して進め五年の月日が流れました。

以下、保育科の先生方と「かざぐるま」が協力して創り上げてきた「んぐまーま」について紹介させていただきます。

「んぐまーま」のついで

「んぐまーま」のころは、友だちをみつければ、みんなで大きくなろう。子どもは共に育ち合う友だちを、親は地域と一緒に子育てする仲間をみつければ、となつていきます。

「んぐまーま」で大きくなるのは子どもだけではありません。同学の保育科学生もひろば実習（二年「家族援助論」）や研究、ボランティアの場として、学生が「家庭における日常生活としての子育て」に触れながら、現代の子育て事情、子育て支援の趣旨、広場の理念、親子へのかかわり方を具体的に学ぶ場となつていきます。学生が「んぐまーま」に入ること、親も自分の子育てや子どもを通して未来の保育者や子育て支援者の養成にとっても協力的ですし、親子が定期的に大学に訪れることで、大学全体で子育てを応援しよう、という校風も育まれています。「んぐまーま」では、子どもの豊かな育ちを軸として、親も、学生も、スタッ

フも、教職員も、大学も、そして地域も共に育ち合うことを大切にしています。

お互いに気持ちよく過ごすために

「んぐまーま」ではあえて約束事を作らず、利用者へのメッセージも、みんなが気持ちよく過ごせるようにお互いに配慮しましょう。というひと言に留めていきます。多胎児を抱えた親子も、障がいがある親子も、外国籍の親子も、産後間もない親子も、日常のさまざまな悩みを抱えた親子も、それぞれの親子が「んぐまーま」で安心してありのままに過ごせるように願っています。

「いままで視覚障がい者の人と接したことがなく、どのような気遣いをしていいのかわからないので、どうしたらいいのか聞いてみたい」「自分の障がいについて周りの子どもたちにどんなふうの説明したらいいのでしょうか？」「何か力になりたいので、大変な時はいつでも知らせてね」などと、利用者同士がお互いに理

解し合おうとする様子が自然に見られ、大人が助け合
い、支え合う姿にふれながら子どもが育っていきます。

ノンプログラム・スポットタイム

「んぐまーま」は基本的にノンプログラムで、大人も
子どもも一人ひとりが主体的に過ごすことを大切にし
ています。来場するなり興味をもったおもちゃに一目
散に向かう子どももいれば、お母さんのひざの上でし
ばらく周りの様子を見てから、おもむろに動き出す子
どももいて、子どもは何かしら自分の意思やイメージ
をもって行動していきます。大人も、ほかの利用者や
スタッフとのおしゃべりを楽しみに来る人もいれば、
子どもを遊ばせつつのんびりしたいと思う人もいて、
それぞれが希望する過ごし方が尊重されています。

ただし、お昼前の十一時三十分と、終了前の十四時
五十分にはスポットタイムとして遠野のわらべうたと
絵本の読み聞かせを行っています。まだ遊びを続けた
い子どもはそのまま遊んでいてよく、あくまで自由参



▲「んぐまーま」の親子の様子

加とされています。

乳幼児期は離乳食や昼寝の時間など生活リズムに個人差があるので、昼食は十一時三十分のスポットタイムの後、室内の座卓テーブル四台でおなががすいた親子から随時とるようにしています。一つのテーブルに三家族くらいが座り、談笑しながら食事をしていきます。親たちはさまざまな話題でおしゃべりを楽しみ、子どもたちはほかの子どもが食べる姿に刺激を受けるのか、家庭での食事よりも落ち着いてよく食べるそうです。大勢で食卓を囲む機会が少なくなっている今日、「んぐまーま」での食事風景はいつまでも大切にしていきたいです。

子どもの育ちをみんなで見守る

「んぐまーま」に集まる子どもたちは〇〇三才が中心です。おもちゃの取り合いなど日常的な子ども同士トラブルについては、周りの大人は事前に回避しようと先回りしてかかわるのではなく、安全に配慮しつつ

も子ども同士でどう決着をつけるのかを傍らで見守っています。子どもたちは周りの大人の見守りの中で、安心して自己主張をし合います。大人はその結果を受け止め、「使えなくて残念だったね。〇ちゃんもほしかったんだよね」とそれぞれの気持ちに寄り添うようにしています。

最近では公園などで子ども同士のトラブルが発生した時に、親が相手の親の顔色をうかがいつつ、まずは自分の子どもに我慢をさせる場合が多いと聞きますが、「んぐまーま」では「〇ちゃんの、ほしい」という気持ちも大事にしたいんじゃないかな。もう少し子どもたちに任せて様子を見ましようよ」とスタッフが親たちに声をかけています。親たちは最初はドキドキしながらも、おもちゃの取り合いを子どもたちの育ちの機会ととらえて、子どもを信じておおらかに見守ろうという雰囲気徐徐に浸透していきます。周りの大人が子どもの理解を深めることは、子どもが育ちやすい環境づくりへとつながり、それは子育てのしやすさに

もつながらることでしよう。

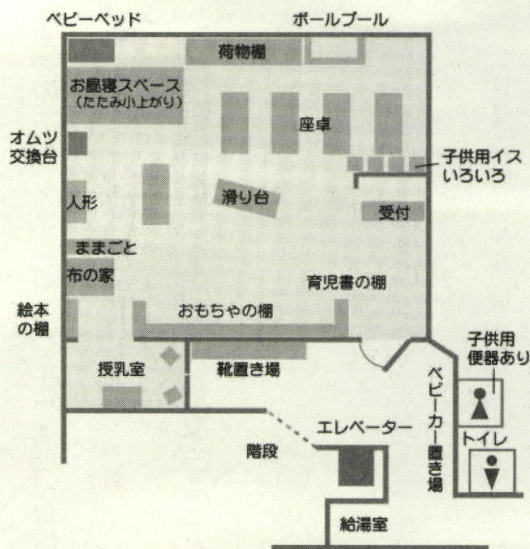
また、実習に入った学生がよく話すことですが、誰が誰の親で誰が誰の子どものものか、一見してわからないくらいに入り混じって過ごしています。子どもたちも安心して自分の親以外の大人にかかわり、優しく抱っこしてくれる人、絵本を持っていくと気軽に読んでくれる人、折ってほしい折り紙をていねいに折ってくれる人、積み木遊びなどにじっくり付き合ってくれる人など、子どもの方がわかまえていて自分から近寄っては遊んでもらっています。「んぐまーま」での日常の小さなエピソードを通して、「いままでは二十四時間、自分一人で子どもを見なければならぬ」と思っていたけど、ここではみんなの子どもをみんなで見守っているのですね」というあるお母さんの言葉のとおり、子育ての大変さも楽しさも仲間と分かち合いながら、親も子どもと一緒に一歩ずつ親として育っていけばいいんだ」と気づき、自分らしく自然体で前向きに子育てするようになっていきます。

スタッフの役割

スタッフは誰でも気軽に参加できるように温かく親しみやすい雰囲気づくりを心がけ、特に新規の利用者に対してはていねいに対応するようにしています。大人も子どもも一人ひとりの人として大切にし、その人自身が本来もっている力を信じて肯定的な見方をするようにしています。子どもを媒介として親同士がつながる場面が増えるように心がけ、親子と学生、親子と情報、親子と地域、親子と社会など、さまざまなつながりも行っています。

子どもの気持ちを尊重して子どもの行動を温かく見守ったり、子どもが発する言葉や合図にていねいに受け答えしたり、子どもとのかかわり方や子育ての楽しさとやりがいを伝えるモデルという役割もあります。

親子により適切な支援を行うために、スタッフはひるばの目的や理念を常に心に留めながら自己研鑽していくことが必要です。毎回の終了後には一日の振り返



▲「んぐまーま」室内図

りをていねいに行い、個々の親子への対応だけでなく、場をどう読みどう受け止めていくのか、各場面でのスタッフの役割分担などについて整理し共有するようにはしています。

保育科の先生方との年数回の運営会議では、年度方針、利用状況、周年行事、学生がかかわる夏祭りと冬

祭り、親子との情報交換会、学生の受け入れ体制、環境設定などについて細やかに協議し、常に情報を共有しながら進めています。

これからも「んぐまーま」を通して、利用者一人ひとりが地域の中で仲間をみつけ、自分のもっている力を発揮しながら、子育ても楽しめるような支援のあり方を発信しつつ、地域の子育て支援の質の向上や地域のネットワークづくりに貢献すると共に、誰もが安心して子育て・子育てできる環境づくりにつなげていきたいです。

(NPO法人子育て応援かざぐるま代表理事・

札幌大谷大学短期大学部保育科非常勤講師)

参考

*札幌大谷大学短期大学部子育て支援センターつどいの広場

「んぐまーま」

<http://ngma-na.boou.jp/>

*NPO法人子育て応援かざぐるま

<http://kazaguruma-i-cis.com/>